

## 「引揚少年」としての西川長夫と韓国

原 佑介

私からは、西川長夫先生にとってそもそも朝鮮半島とはどのような場所だったのかについて、少しお話しさせていただこうと思います。

フランス文学研究から研究者生活を始められた西川先生は、晩年、アジアとりわけ韓国と台湾に頻繁に通われ、精力的に活動なさいました。このことには大きな意味があったと思います。台湾では、大学で毎年連続集中講座を持たれました。韓国では、大学の内外で講演やインタビューを何本もこなされ、著書も翻訳が4冊出ています。先生が植民地朝鮮で生まれ育ち、満洲で日本の敗戦を迎えた「引揚少年」だったことを考えれば、これは一種の「アジア回帰」だと見ることもできます。そうすると、1968年のパリ五月革命やカナダでの教員生活をはじめとする青年期・壮年期のフランス体験、西洋体験は、自らがかつて追放されたアジアにたどり着くのに必要な迂回路であったかのような印象さえ受けます。最後の論集『植民地主義の時代を生きて』にある著作目録をペラペラめくってみても、前期はスタンダールやアルチュセールの名前を中心にカタカナが目立つのに対し、晩期はにわかにはハングルがたくさん登場するようになります。こうした外面的な変化一つとっても、西川先生の戦後の歩みは、ご自身が「原点」、「原風景」と呼ばれた旧植民地への複雑な回帰の道のりであったような感をいっそう強く持たずにはいられません。

西川先生と韓国、朝鮮半島、そしてアジアの関係を考える時、朝鮮生まれの植民者二世だったという出自は、決定的なことだったと思われます。先生が人生の初期において朝鮮の人々と同じ国民国家の国民であった、という事実は、きわめて重要です。そこにこそ西川先生の国民国家批判の最も重要な原点の一つがあり、また先生にとっての韓国、朝鮮半島という場所の重さと難しさがあったのではないのでしょうか。

私の印象にすぎませんが、雄弁な文章の書き手であった西川先生が、こと朝鮮の話になると、書くにしても語るにしても、途端にどこか慎重に、もっと言えば臆病になり、あるいはあたかも失語症にかかったようになっておられた、そういう記憶が残っています。植民地の記憶を語ろうとする時の、あのいつも何かひっかかったような物言いは何だったのか——今では推測するしかありませんが、そこには、わかっているが語れない、あるいは、語ろうにもただ語りえない、そのようなものがあつたのではないかと思います。

そのような中、先生が朝鮮体験を主題にされた例外的なテキストが、最後の論集『植民地主義の時代を生きて』所収の「私にとっての朝鮮——遅れてきた青年の晩年について」というテキストです。先生が亡くなる日のぴったり2年前に当たる2011年10月28日、韓国の延世大学で、西川先生が少年時代の植民地体験を語られた講演の記録です。西川先生がこれだけまとまった形でご自身の朝鮮体験、植民地体験を語ったのは、これが唯一ではないかと思います。

実は、このテキストには少し複雑な成立事情があります。もともとは西川先生ご自身が日本語原稿を準備して韓国での講演で読み上げられたのですが、その録音記録が韓国語に翻訳され、まず韓国の雑誌に掲載されました。これを私が再度日本語に訳し直したものが、現在残っている日本語テキストです。

西川先生が入院なさっていた2012年の年末のある日、私は先生に呼ばれて病院に行きました。手術後の回復が思わしくなく、先生はベッドの上で起き上がることもままならない状態でした。先生は私に、最後の論集に収めたいから例の韓国語講演録を日本語に翻訳してくれ、とおっしゃいました。なぜそのようなまわりくどいことをするのか、私はその意図がよくわからず、「先生が直接書かれたオリジナル原稿があるのだから、そちらを収録すればいいのではないですか」と申し上げました。そのほうが話が早いし、何より二度の翻訳を経ると先生のオリジナル原稿がその分損なわれてしまう、というわけです。すると先生は、次のようなことをおっしゃいました。「このテキストは、私が韓国で、韓国人の前で話したということに意味があるんです」。したがって、このテキストに含まれているのは、韓国以外の場所では発せられることのなかった、逆に言うと、韓国でこそ先生が語らなければならなかった言葉です。

冒頭で明らかにされているように、この講演は、「私の生涯と学問、そして朝鮮」というテーマを韓国の主催者側から提示され、それに先生が応答する、というものでした。テーマを見た時、先生は、「自分の内なる『朝鮮』に初めて正面から向き合うことを余儀なくされた」と打ち明けておられます<sup>1)</sup>。「私はこれまで自分が幼少年期を過ごした朝鮮や満州の懐かしい思い出について語ることは強い抵抗があり、そのような機会をできるだけ避けてきました。この演題の文字を見た瞬間にも、私の内面の防衛機能が発作的に作用したのは確かですが、同時にこの長い間の禁忌（タブー）が急に解けて、長い間抑圧してきた幼少年期の懐かしい思い出が噴出してきたのも事実です。しかし、幼少年期の懐かしい記憶の背後には、戦争という時代と植民地という場所の過酷な現実があります<sup>2)</sup>。」

このように、朝鮮、植民地は、先生の記憶の中で引き裂かれた場所としてあり続けました。こうしたご自身の実体験に直接的に関わる植民地のことを語る時、先生が繰り返し思い浮かべていたイメージがあったのではないかと私は考えています。それは、安全で秩序だった世界がひっくり返ったところ、あるいはその世界の裂け目の奥に存在するもの、一見ごく普通の世界の裏側に潜むもの、といったイメージです。このような複雑なイメージをなんとか表現するために、先生は「裏面」「裏側」「倒錯」「崩壊」といった、物事がひっくり返るイメージの言葉を頻繁に使われました。講演とは別の文章ですが、最も象徴的な語り方に、次のようなものがあります。

だが植民地という不快な粘液質の言葉が私の身にまといつくようになったのは、幼少期の十一年間を過ぎた植民地においてではなく、帰り着いた日本本土においてであった。おそらく北朝鮮の外界と遮断された抑留生活の十ヶ月の間に純粹のままに保持された愛国少年は、占領下の日本社会の屈辱的な現実を素直に受け入れることができなかったのだろう。進駐軍のジープの後を追ってチューイングガムやチョコレートをせがむ子どもたち。それはまさしく植民地的風景であった。それ以後、植民地あるいは植民地主義という言葉は、日

本の戦後社会に対する私のひそかな違和感と孤独を表わす言葉として私の体内に潜伏し続けてきたのではないかと思う。

だが考えてみればこれは奇妙に倒錯した体験である。植民地に住んでいた間、私は植民地を意識せず、帰国した日本で植民地的現実を知り、日本社会のそうした植民地的状況のなかで過去の記憶をたどることによって、ようやく自分の生れ育った土地が植民地であったことを理解しはじめたのであるから<sup>3)</sup>。

このように、占領軍に向かって「ギブミーチョコレート」と叫ぶ子供たちや大人たちが、それを植民地的状況だとまったく認識していないことに激しい衝撃を受けた、と西川先生は回想しておられます。では、なぜ先生はその状況を植民地的だと知覚しえたのか。それは、先生ご自身が植民地から引揚げてきた軍人の息子だったからです。

では、植民者二世の少年は植民地で何を見たのか。講演の中で西川先生は、植民地ののどかな風景の奥に潜んでいる植民地主義の闇を垣間見た体験、平穏な現実が一気にひっくり返る瞬間に立ち会った体験について、繰り返し語っています。曰く、お父さんに連れて行ってもらった朝鮮の美しい海の向こう岸に巨大な工場があった……あるいは満洲の記憶ですが、狐を追いかけて夢中でコーリャン畑を走っていると、突然目の前に刑務所のような不気味な建造物が現われた……植民地で見たそれらの建物が、後に日本で水俣病をまき散らすことになる日本窒素の工場や、細菌戦の研究や人体実験を行っていた 731 部隊の施設だったことを、先生は戦後ようやく知ることになります。戦後を生きる中で、朝鮮、植民地の記憶が、次々にひっくり返っていくわけです。先生はそれをこのように言い表します。「咸興湾の青い海は、私の脳裏で美しく美しい思い出として残っていますが、水俣病事件の後には、明るく輝く紺碧の海が、一気に『死の海』のイメージへと暗転してしまったのです<sup>4)</sup>。」

秩序と平和に満ちた世界の裏側に潜む植民地主義は、甘いチョコレートを携えた「進駐軍」の姿をとって、西川長夫少年の前に初めて姿を現したのです。そのことを通して彼は、かつて「基地の子供」として魚釣りをしたり戦争ごっこをしたりして平和に暮らしていた場所が、他ならぬ植民地であったことを悟ります——「朝鮮、満州にいた時、私は自分が植民地にいるということをほとんど意識できませんでした。占領下の日本に帰って初めて、私は『自分がどういう場所で生まれ育ったのか』ということをも自分自身の問題として考えるようになったのです<sup>5)</sup>。」

西川先生が近代国民国家の暴力性や排他性を覆い隠す装置だとして特に鋭く批判なさったものの一つに、「文明」イデオロギーがあります。「文明」が、まるでチョコレートを笑顔でばらまいてくれる軍隊のように、国民に一定の富や安全や秩序をもたらすことは事実です。その裏側を見通そうとする西川先生の強い意志は、敗戦と引揚げによってひっくり返された世界の裏側に生々しく巢食う「植民地的現実」を目の当たりにした少年期の体験がなければ、ありえないものだったと思います。植民地での生活、抑留、引揚げ、そして本土での焼け跡生活を通して、富や安全や秩序を国民にもたらす国民国家の裏側としての、あるいは国民国家のエネルギー供給源やゴミ捨て場や実験場の役割を押しつけられる場としての、植民地の現実を見せつけられる——少年期のその体験が、戦後半世紀以上におよぶ先生の批判意識を支え続けたのだと思

ます。

朝鮮半島は、大日本帝国の繁栄と栄光の最大の踏み台とされた場所でした。その意味でそこは、国民国家の裏側としての植民地という戦後なお継続する現実を、西川先生に絶えず突きつけてくる場所だったのではないのでしょうか。しかしながら先生は、そのことについては多くの語りえぬものを残したまま逝かれました。私は、西川先生の国民国家論においては、「国民国家論と帝国」というテーマに比べて、「国民国家論と植民地」、「国民国家論とアジア」、あるいは「国民国家論と朝鮮半島」といった重要なテーマは、まだまだ不十分な状態で途絶してしまっていると思います。そうしたテーマは、日韓の研究者が共同で取り組むべき課題として私たちの前に残されています。

#### 注

- 1) 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』（平凡社、2013年）233頁
- 2) 西川長夫同書、233-234頁
- 3) 西川長夫『〈新〉植民地主義論』（平凡社、2006年）6頁
- 4) 西川長夫『植民地主義の時代を生きて』237頁
- 5) 西川長夫同書、243-244頁